Tokyo Metropolitan Archaeological Center

たまのよこやま

縄文時代も地球は青かった！

東京都埋蔵文化財センター報 95

速報！ 東京都埋蔵文化財センターの 楽しい体験イベント 2013秋・冬

東京都埋蔵文化財センターでは、今年度も皆さんが楽しく参加できる体験イベントをご用意いたしました。下半期の注目行事について、ダイジェストでご紹介します。

日本人の秋といえば、よく「読書の秋」や「食欲の秋」に代表されますが、私たち埋蔵文化財センターでは東京都教育委員会が企画した**『東京文化財ウィーク 2013』**に参加して、さまざまなイベントを開催しました。

10月には、**「遺構（いこう）を実測してみよう！」**をセンター隣の遺跡庭園「縄文の村」で行いました。これは、私たちが通常、遺跡を発掘調査したときに発見された竪穴住居跡などを図面に記録する実測作業を、実際に体験するという昨年に引き続いての企画です。使用する道具は、平板測量器（へいばんそくりょうき）（以下平板）、テープメジャー、長さ3mのポールなどです。平板は3人ひと組で作業を行いますが、器械をのぞく人やテープの両端で距離を測る人との呼吸がとても大事です。

1日かけて何とか「縄文の村」に野外展示された竪穴住居跡の模型の平面図が仕上がると、参加者の皆さんの顔には、安堵感（あんどかん）と充実感（じゅうじつかん）とが入り混じったような表情が溢れて、何だか指導していた私たちもうれしくなりました。ただ、皆さんが本当にたいへんだったのは、秋だというのに一向に減らないヤブ蚊の攻撃だったと思います。蚊取線香を10個も設置しての考古学実習というのも珍しい体験でした。来年は蚊がいなくなってから、じっくり行いたいですね。

つづいては、**「縄文食体験」**です。このイベントは知る人ぞ知る、と言いましょうか、根強いファンがおられます。ふつう「縄文食」と聞けば、質素なイメージがわきます。ドングリクッキー、ヤマイモやイノシシの汁ものなどは定番ですが、あまり食欲をそそらない人もいるでしょう？

「遺構を実測してみよう」　初めての測量に四苦八苦

縄文食体験　親子で息を合わせてクルミ割り

ところがです。当センターでは新鮮な食材を使い、腕の良いオーナーシェフのNさんによって、縄文食もある意味、高級なジビエ風料理に変身するのです。

今年は、二つの台風の影響で予定が一週間延期しましたが、多くの方に参加いただきました。マテバシイのグリル、イノシシ鍋、エゾシカのソテーや石蒸しによる鶏肉料理など、皆さんと下ごしらえを行った食材を、遺跡庭園で調理しながら、ひと時を過ごすことができました。しばし、大古（たいこ）の昔に思いをはせて味わう縄文食は、とても美味しく、毎年参加を希望される方がいらっしゃるのも理由がわかる気がします。本当に美味しかったですから。ぜひとも、来年はあなたも参加してみませんか。

12月には、第3回文化財講演会を行いました。今回は、市原市埋蔵文化財調査センターの忍澤成視（おしざわなるみ）さんにお願いしました。テーマは**『縄文人と貝アクセサリー』**です。忍澤さんは、貝塚から発見された貝輪の流通や作り方を研究されており、自ら南海の孤島に出向き、命がけで材料の**オオツタノハ貝**を採取するという気鋭の考古学者です。当日は、迫力満点の動画に加え、自分で集めた貝の美しい標本を持参してくれました。参加された皆さんは、新鮮な感動を味わうことができたのではないでしょうか。この2月に3回シリーズで**「東京の中世城郭（じょうかく）」**に関する興味津々の文化財講演会を行いますので、お楽しみに！！　（松崎元樹）

遺跡だより 99

北区桐ヶ丘遺跡

所 在 地：北区赤羽北三丁目 16 番他
調査期間：2013 年 1 月～ 10 月
調査面積：7,660 ㎡

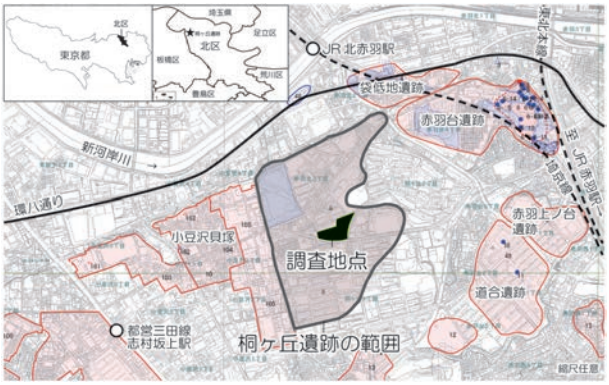
桐ヶ丘遺跡は、武蔵野台地の北東端、本郷台北部の赤羽台と呼ばれる標高 21m 程の台地上に立地しています。赤羽台北部には東西にのびる 3 本の樹枝状の谷地形が形成され、北から八幡谷、亀ヶ池谷、稲付谷と呼ばれています。遺跡の位置は赤羽駅北部から西方に形成された八幡谷の最奥部にあたります。

調査は、都営桐ヶ丘二丁目団地建設に伴い、桐ヶ丘北小学校跡地を対象に行いました。その結果、旧石器時代の遺物集中部、縄文時代の土坑 8 基、弥生時代の竪穴住居跡 10 軒、古墳時代の竪穴住居跡 4 軒、古代の竪穴住居跡 2 軒・掘立柱建物跡 8 棟・大形土坑 4 基、中近世の溝、近現代の待避壕等が確認されました。今回は、この中から旧石器時代の調査で得られた成果についてご紹介します。

旧石器時代の調査では、立川ローム層のⅣ層上部～Ⅸ層の各層から石器約 1,800 点、礫約 4,000 点の遺物が出土しました。遺物の分布は、東側に位置する八幡谷に近い部分が濃密で、遺物集中部は約 20 ヵ所以上になります。石器は、ナイフ形石器・石刃・角錐形石器・尖頭器・台形様石器・斧形石器・掻器・削器・石核・たたき石・礫などがあります。

Ⅶ層から出土した石刃は、黒色頁岩や頁岩製で長さ 8 ～ 10cm を測る大形のものです。このような資料は、千葉県などに類例が見られますが、武蔵野台地では数が少なく貴重な事例です。また、北区では初めてと思われる斧形石器が出土しました。ホルンフェルス製で、長さ 10.5cm、幅 7.7cm、厚さ 2.6cm、重さ 233 g です。平面形はいわゆる「撥形」を呈します。下端の刃部と思われる箇所に、研磨の痕跡は認められませんでした。

石器の石材は、チャート・ガラス質安山岩・ホルンフェルス・黒曜石・緑色凝灰岩・頁岩等があります。特にガラス質安山岩が多いようです。チャートやホルンフェルスは荒川（古入間川）や多摩川で採取が可能です。ガラス質安山岩についても礫面の残る資料が多いので、そう遠くない場所で採取されたと考えられます。一方、遠隔地から運ばれてきた石材もあります。黒曜石は信州系や伊豆・箱根系など複数の産地のものがありそうです。緑色凝灰岩は丹沢山系、チョコレート色をした良質の頁岩は奥羽山脈南部産の可能性があります。　（山田和史）



桐ヶ丘遺跡の位置と調査地点

Ⅶ層～Ⅸ層の石器集中部

Ⅶ層から出土した石刃

Ⅸ層下部から出土した斧形石器

ぶらり旧石器さんぽ　Vol.6

丘陵の遺跡　多摩ニュータウン遺跡群

「ぶらきゅう」シリーズでは、東京都内の旧石器時代の遺跡を訪ね、旧石器時代人がどのような場所に暮らしたのか、それぞれの土地の起伏などの地形と景観の復元を通じて、紹介していきます。

多摩丘陵と遺跡　今まで武蔵野台地のことばかり話題にしてきましたが、多摩丘陵にも旧石器時代の遺跡があります。

丘陵とは起伏が山地より小さく台地より大きい地形を言い、急傾斜の斜面が多く平たい土地が少ないのが特徴です。多摩丘陵は、今でこそ開発が進み平らになりましたが、元々は川沿いに平らな面がある以外は山がちな地形をしていました。

多摩ニュータウン遺跡群　多摩ニュータウン遺跡群は八王子市、多摩市、稲城市、町田市にまたがる、964ヵ所の遺跡から構成されています。このうち旧石器時代の遺物が出土した遺跡は170ヵ所で、その数は武蔵野台地と比べても決して遜色がありません。ただ、それらの多くは大栗川、乞田川、境川といった中小河川に沿った段丘と呼ばれる平らな土地にあり、川から離れたや急斜面の土地にはほとんどありません。

武蔵野台地の場合でも、中小河川にもっとも近い段丘上に遺跡は多く、川から離れた奥まった高台には遺跡はほとんどありません。川のすぐ近くに遺跡があるという点で、台地も丘陵も違いがないのです。確かに丘陵の方が平らな土地が少なく暮らしにくい可能性はありますが、逆に周囲に高低差があるため環境が変化に富み、様々な動物や植物がいて食糧の種類は豊富だったかもしれません。　（伊藤　健）

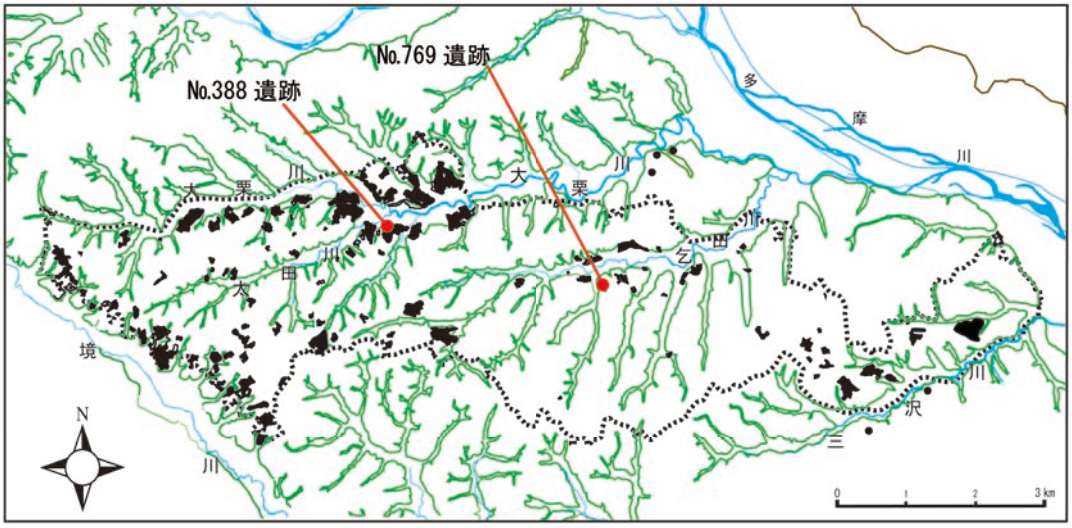
参考文献

比田井民子　2012「多摩ニュータウン遺跡群を中心とする丘陵地形における後期旧石器時代遺跡の分布と環境について」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』ＸＸVI

舘野　孝　2012「旧石器時代のセトルメント」同上

多摩ニュータウンNo.388遺跡（八王子市）
太田川の川沿いにあり、川よりも一段上の段丘上に位置している。

多摩ニュータウンNo.769遺跡（多摩市）
平らな地形とはいえ、手前から奥に向かい上っているのがわかる。団地のある場所は小高い山で旧石器時代の遺跡は見つかっていない。



多摩ニュータウン遺跡群の旧石器時代の遺跡
川の近くに多くの遺跡がある。川から外れた小さな谷筋には、平坦な面が少ないため遺跡は少ない。点線内が多摩ニュータウンの範囲、黒塗り部分が旧石器時代の遺跡。
（「舘野 2012」を元に作成）

続 大江戸 掘りもの帖 ～5～

台場と七厘　ー凝灰岩質石材の利用からー

前号の「遺跡だより」98 では、幕末期に築かれた品川台場のうち、品川埠頭に埋没した幻の第五台場の調査を紹介しました。石垣の前面にはおどろくほど大量の石が敷き詰められ、「捨石」工法によって埋め立てられた人工島砲台の海面下のすがたが浮かびあがってきました。

台場公園として残る史跡第三台場では、いまも石垣をみることができますが、真鶴・伊豆半島から運ばれた硬質な安山岩が積まれています。これに対して、埋め立て用の石材には、柔らかく運搬や加工のしやすい「土丹」（泥岩）や凝灰岩質石材が使われています。台場築造史料に「三浦土丹岩」「三浦石」として登場するこうした石材は、その名の示すとおり三浦半島の横須賀周辺から主に切り出されたものです。一方、岩石学では対岸の房総半島まで連なる上総・三浦層群に含まれるため、房総側からも同質の石が産出されます。

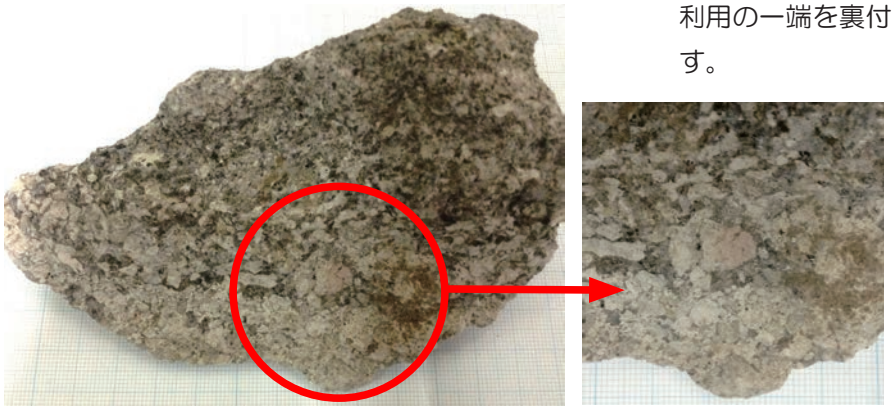
下の写真は、捨石のなかでもとくにガサついた粗粒な砂礫の多いタイプの凝灰岩質石塊ですが、一部に淡いピンク色の軽石が観察され、房州石のなかでも「桜目」といわれる模様に似た特徴を兼ね備えています。

これによく似た石材を最近発掘された遺物のなかから発見しました。遺跡は、新宿区市谷本村町遺跡、江戸時代には尾張藩江戸上屋敷邸内にあたります。写真（下段左・中）の切り出し七厘は、藩邸を盛土した地層から、18 世紀中ごろを中心とする大量の遺物とともに出土したものです。

「地獄のぞき」で有名な鋸山（千葉県富津市）の山頂展望台には、かつて石丁場で使われていた石切り道具などとともに切り出しかまどが展示されています（写真下段右）。加工しやすく耐熱性にすぐれた房州石は、地元に残る資料によると少なくとも江戸中期には七厘やかまど、石仏の用材として利用され、幕末期の品川台場埋立を皮切りに、明治から昭和にかけて建築・土木用材として盛んに切り出されます。調査で明らかになった台場の捨石のようすや七厘の出土は、まだ断定はできませんが、房州石の利用の一端を裏付けるものではないかと考えています。

江戸から近代にかけて、市井の人々の暮らしからインフラ整備にいたる場面まで、広く支えた縁の下の力持ちである石材がどこの出身なのか？ これからも注目していきたいところです。

（大八木謙司・内野　正）



品川台場（第五）遺跡出土の凝灰岩系石塊

石製七厘の底面

新宿区市谷本村町遺跡出土の石製七厘

房州石製のかまど
（鋸山ロープウェー山頂駅内／千葉県富津市）

「縄文文化出現前夜を考える」

―平成25年度 東京都埋蔵文化財センター第1回文化財講演会要旨―

縄文時代の始まりについては、戦後間もない昭和20年代から深い関心が寄せられ、山内清男、芹沢長介氏らをはじめとする高名な考古学者により、年代や編年、土器の系譜についての多くの学説が唱えられました。この時代は、後期更新世から完新世への寒冷な時期から温暖な時期への過渡期でもあり、そうした環境への適応が縄文時代文化の開始に関わっているとも言われております。

1万年から1万3千年ぐらい前の年代と言われる縄文時代初めの土器が、大陸からの系列のものであるか、日本列島独自のものであるかの議論や、その後の縄文時代の土器と同系のものと考えて良いか否かなどの議論も生まれ、未だはっきりした答えは出ておりません。

こうしたなか、昭和30年代から40年間にわたる発掘調査が行われた多摩ニュータウン遺跡群では、縄文時代草創期の遺跡が東日本のなかでも多く発見されています。隣りの神奈川県の相模野台地にも縄文時代草創期の遺跡が多く、多摩丘陵から相模野台地にかけての地域が、初めて土器が使われた日本のなかの一つの中心地であったと言っても過言ではないでしょう。特に、多摩ニュータウン№796遺跡に見られるように、草創期でも最古の土器に、隆起線文土器ばかりではなく多様な型式が見られるのもこの地域の特徴です。

土器の編年、系譜の問題などはさておき、なぜ多摩ニュータウン遺跡群のある多摩丘陵から相模野台地に、こうした縄文時代の最も古い土器の遺跡があるのでしょうか。

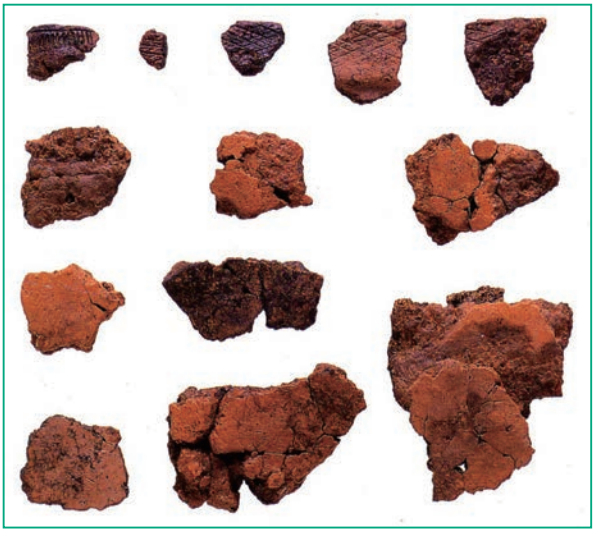
この時代の遺跡の分布を見ると後期旧石器時代の遺跡と殆ど同じ分布域にあります。後期旧石器時代の終末の日本列島は大陸からの細石器文化の影響を北と南から強く受けて、細石器文化が定着していった時代です。

多摩ニュータウン遺跡群の後期旧石器時代終末も丘陵のなかを東西に流れる大栗川、乞田川の段丘に№388遺跡、№301遺跡、№769遺跡など細石器文化を代表する細石刃、細石核をたくさん出土する遺跡が遺されます。そのほか、大形の尖頭器が出土する遺跡も存在します。そうした後期旧石器時代終末の石器の一部は、縄文時代草創期初頭にも引き継がれ、土器の存在を除けば旧石器時代か縄文時代か区別できないような内容の遺跡も見られます。

一方で、石器の石材の使い方には変化が見られ、多摩丘陵の石材であるホルンフェルス、チャート、安山岩など地元の素材を使った石器作りを行うようになります。それまで石器によく使われていた信州や伊豆で産出されるガラス質の石材である黒曜石は、しばらく使われないようになります。

最古の土器の出現については諸説ありますが、多摩ニュータウン遺跡群のある多摩丘陵から相模野台地にかけての、縄文時代草創期初頭では、遺跡の分布や出土する石器から、後期旧石器時代最終末期の姿を引き継ぎながら、最古の土器を持つようになった可能性も考えられます。

縄文時代草創期の遺跡が多い九州地方でも、最古の土器が後期旧石器時代終末期の石器と共に発見される例が増えています。　（比田井民子）



多摩ニュータウン№796遺跡出土　縄文時代草創期初頭の土器（左）と石器（右）

多摩ニュータウンNo.511遺跡は、京王相模原線永山駅南方の多摩市馬引沢にあります。ニュータウン造成前の馬引沢は、自然豊かな里山の面影を宿した場所でした。現在のおしゃれな街から開発前の風景を想像すると、変化の大きさに驚かされます。開発前の風景は、ちょうど宮崎駿監督の人気アニメ「となりのトトロ」に出てくる田舎のシーンを思い出します。多摩市唐木田や八王子市別所の谷戸も似たような風景でした。私のような東北地方（福島県南部）の寒村出身の人間（1950年生まれ）にとっては、懐かしい景色でした。都会育ちの人に例えれば、「ラーメン博物館」や映画「三丁目の夕日」の世界と言えるかもしれません。

発掘調査は、1982年5月から12月まで行いました。その結果、旧石器時代から江戸時代までの人々の生活した跡が見つかりました。私が担当したのは、江戸時代初め頃の穴を掘って柱を立てて造った掘立柱の民家の跡でした。二棟の家が棟を直角に接して並んで建つ分棟型と言われる造りの民家です。この分棟型民家の謎については、ずっと頭の片隅から離れませんでした。

そして、だいぶ後の平成9年（1997年）に、分棟型民家の系統と稲作農耕との関係について、短論にまとめました。その後、この民家をきっかけにして、中世の後北条氏が敗れて徳川家康が関東にやって来る中近世移行期について、数編の論文を書くこととなり、現在も頭の中で考え続けています。中近世移行期は、日本が大きく変化した時代でした。馬引沢の片隅に建てられた民家を通して激動の時代を復元すると、どのような世界が見えてくるのか、ワクワクしながら考え続けています。

現在検討していることは、中近世移行期と第二次世界大戦から戦後にかけての時代との比較です。両時代とも、戦争から平和へと大きく変化した時期です。戦争に費やされていたエネルギーは、田畑を開墾したり都市（城下町）を建設したり、道路を整備したりと土木建築分野に向けられるようになり、結果として人口も大きく増加しました。

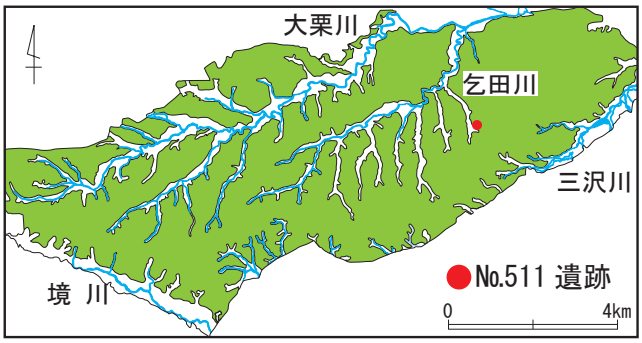
現在はこのような時代が収束して、一気に少子高齢化社会を迎え、経済も不安定な時代となっています。遺跡を通して見る歴史が、現代社会を考える上で、少しでも参考になれば、調査担当者としてはささやかな義務を果たしたことになると考えています。

今後も遺跡の調査に携わる人間として、地域の歴史の復元と現代社会との関わりについて考え続けていきたいと思っています。（今井惠昭）

1/964

多摩ニュータウン地域では、964ヶ所もの遺跡が確認されています。その中から調査担当者の記憶に深く残る遺跡について、リレー方式で振り返っていきます。

＃16 多摩ニュータウンNo.511遺跡



多摩ニュータウンの遺跡

No.511遺跡遠景

No.511遺跡の掘立柱建物跡（民家跡）

分棟型民家（千葉県作田家住宅／川崎市民家園移築）

平成25年度　年間展示解説シリーズ　その3

縄文人のおしゃれ

―装い・デザイン・色彩―

平成25年度年間展示解説シリーズ最終回の今回は、縄文人の色彩についてです。

先日来館されたお客様が、縄文人が使っていた色について紹介したコーナーをご覧になり、こんなことをおっしゃいました。

「縄文時代のモノって、何だか茶色っぽいイメージだったけど、違うんですね！」

確かに縄文時代の資料の多くは石器や土器などが主で、色彩的に決して豊かであるイメージは湧いてきません。だからといって縄文人の身の回りの色が単調であったというわけではなく、縄文人もその世界観にあわせ、様々な工夫を凝らしながら身の回りを彩っていたのです。

多摩ニュータウンNo.243・244遺跡からは、土器の表面を赤と黒に彩った注口土器が出土しています（タイトル写真）。残念ながら全体の形状は復元されていませんが、類似資料から瓢形をしていたと考えられ、表面を細い隆起線による渦巻文様で飾っています。隆起線を境に塗り分けられた赤と黒の取り合わせは、見る人に強いインパクトを与えます。

さらに興味深い装飾が施されているのは、世田谷区松原羽根木通遺跡出土の鉢形土器です。外面は、きれいに磨かれているだけで、文様がつけられていません。しかし内面には、全面に白色を塗り、その上から赤い色で渦巻を描いているのです。

彩色が施されたのは、土器だけではありません。世田谷区岡本前耕地遺跡出土の木製浅鉢は、全面に赤色漆と黒色漆が塗られています。また、前回紹介した耳飾り等の装飾品にも彩色されたものが多く見られます。

このように色の塗られた資料を見ていくと、あることに気づきませんか？そう、赤い色を塗られたものがとても多いのです。赤は、縄文人が最も多く使用し、強いこだわりをもっていた色です。

しかし、クレヨンやペンキも無い縄文時代に、この赤い色をどのように塗ったのでしょうか？

実は、この赤い色の正体は、鉱物を砕いて粉にした顔料（岩絵具）なのです。原料から、酸化鉄を主成分とする「ベンガラ」と、硫化水銀を利用する「朱」に分けられ、色合いも異なります。ベンガラはやや黒みがかり、朱は鮮やかな赤色です。

ベンガラにはいくつかの種類があり、それぞれの発色に違いが見られます。ベンガラの結晶を電子顕微鏡で覗くと、細い筒のような形をしたものが見られます。これは「パイプ状物質」と呼ばれ、鉄を利用するバクテリアによって作られたものです。他に、地層の間に薄く堆積した「板状の褐鉄鉱」、葦などの繊維構造が見られることから沼地に堆積したと考えられる褐鉄鉱「沼鉄」などがあります。「パイプ状物質」が赤みが強く鮮やかな色合いを持つのに比べ、他の二種は褐色に近い色合いで、赤色というよりも黄色がかっています。

縄文人が最も好んだのは、赤い「パイプ状物質」のベンガラですが、これはどこでも採れるというものではありません。では縄文人はどうしたのでしょうか？どうやら、褐色のベンガラを砕いて粉にし、熱を加えることで酸化を進め、「褐色」を「赤」に変えていたようです。

手に入らないからと身近にあるもので済ますのではなく、手間をかけて別のものから自分達の求める「色」を作り出す。縄文人の赤に対するこだわりがうかがえます。

三回にわたってお送りしてきた平成25年度企画展示解説シリーズですが、今回をもって終了いたします。

3月15日からは、平成26年度の企画展示が始まります。テーマは「古代びとの祈りとマツリ」です。ご期待ください。

（武内　啓）

たまのよこやま 95　　2014年2月17日発行
東京都埋蔵文化財センター　〒206-0033 多摩市落合 1-14-2　TEL 042-373-5296　http://www.tef.or.jp/maibun/